慶應言語学
コロキアム

慶應義塾大学言語文化研究所
The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies

GK/MC から問い直す ミニマリストプログラムの 30 年と理論の新展開

講師: **勝　愼将**（南山大学）

司会・コメンテーター: 北原　久嗣（慶應義塾大学）

日時: 2026 年 3 月 1 日(日) 10:00〜19:00 終了（予定）
※昼食休憩 13:00〜14:00 を含む

会場: 慶應義塾大学三田キャンパス北館大会議室 ※対面開催のみ

使用言語: 日本語

参加申込: 研究所ホームページもしくは右のＱＲコードよりお申込み下さい

＊ 準備の都合により、事前申込をお願いいたします。
＊ 事前にお申込みいただかない方の当日参加も可能ですが、会場にて参加者カードへご記入いただきます。
＊ 今回のセミナーは生成文法研究の専門的知識が前提となります。

『ミニマリストプログラム 30 年の足跡』は、2025 年 11 月に開拓社から出版された本であり、ミニマリストプログラムの嚆矢である Chomsky (1995) *The Minimalist Program* から、最新の理論である Chomsky (2021) “Minimalism: Where Are we Now, and Where Can we Hope to Go” (GK) および Chomsky (2024) “The Miracle Creed and SMT” (MC) までの、Chomsky の主要論文 14 本を解説しています。本書では、各枠組みの内容を、原典に忠実に解説することを試みました。その内容を踏まえ、本コロキアムでは、i. 過去の理論を現在の目線で再考することと、ii. 現在の理論に到達したことで見えてくるものを、今後の展望を含めて考えたいと思います。

本コロキアムは二部構成を予定しています。ミニマリストプログラムにおける主要概念の変遷、各論文で扱われていた言語現象は本書中のコラムでも簡単にまとめていますが、過去の理論で扱われていた現象が GK/MC の枠組みの中でどのように捉えられるのか、また、各操作、提案に現在定式化できないものがあるとすると、それらはどのように説明するのかを議論したいと考えています。その後、GK/MC の枠組みが、Chomsky がそれまで扱っていた現象を離れ、日本語の構文にどのように適用し得るかを、講師の最近の研究を踏まえて議論していきたいと思います。具体的には、enabling function/IM-over-EM の相互作用による日本語関係節や英語 tough 構文の分析および、構造から解釈への instruction という観点から phase の解釈を考えることで、日本語の bare *wh* construction を分析することを予定しています。

共催: 科学研究費助成　基盤研究（C） 25K04101『併合と最小探索に基づく日英語比較研究：統辞構造はどのように生成され解釈されるのか』

主催 慶應義塾大学言語文化研究所

［お問い合わせ先］
〒108-8345　港区三田2-15-45　慶應義塾大学言語文化研究所
電話：03-5427-1595（事務室直通）　メール：genbu@icl.keio.ac.jp
http://www.icl.keio.ac.jp